

# うたとかたりの対人援助学

## 第8回 かたりの文化としての手話 その2

鵜野 祐介

### 京都府立聾学校訪問

前回、英国スコットランドにおける手話を用いた「昔語り」の活動に触れた。同様の活動が日本でも行われていないか調べていくための手がかりとして、ろう学校の関係者とコンタクトを取りたいと考えていた時、筆者が入会しているマザーグース学会の会員・高屋一成先生が京都府立聾学校の英語教師であることを、筆者のエッセイを読んで下さった別の会員の方から教えていただいた。高屋先生に連絡を取り、今年(2018)2月20日(火)、同校への訪問が実現した。

筆者の勤める立命館大学衣笠キャンパスの研究室を出て西へ細い道を15分ぐらい歩いていった仁和寺北側の山麓に、京都府立聾学校があった。明治8年(1875)、日本で最初に創設されたろう学校「京都盲啞院」を前身とする、由緒ある学校である。敷地内には広い運動場や寄宿舎なども配備されていた。

午前11時、高屋先生の案内でまず酒井弘校長先生にご挨拶し学校の概要をお聞きした後、早速授業を見学させていただいた。にわか仕込みの手話の挨拶が通じるか不安だったが、生徒さんたちは笑顔で応じてくださった。3月の卒業を前に、研究発表や作品の仕上げに一生懸命取り組んでいる様子に心打たれた。先生たちも最新の視覚機器を活用して、工夫をこらした授業を実践しておられた。目の前に新しい世

界が開かれる思いがした。

### 奈良県立ろう学校訪問

手話を使った民話の語りの活動について調べていることを酒井先生にお話ししたところ、奈良県立ろう学校でやっているかもしれないと、同校をご紹介して下さいました。

7月3日(火)の午後、大和郡山市にある同校を訪問した。近鉄筒井駅で下車し、15分ほど田圃の中の直進道路を歩いていくと、盲学校と隣接してろう学校が建っていた。広中嘉隆校長先生が出迎えて下さり、中学部の吉本努先生をご紹介くださった。

吉本先生はろう者の教師で、以前幼稚部を担当しておられた時に、絵本の読み聞かせを手話でしておられ、日本や外国の民話の絵本を積極的に取り上げておられたという。お話をうかがった後、聾教育研究会『聴覚障害』第57巻5月号(2002年)に寄稿の実践報告「絵本の読み聞かせを考える」のコピーをいただいて帰った。

### 実践報告から

吉本先生は1996年に幼稚部に配属されると、担当した5歳児に手話を使って「しあわせの王子」「かぐや姫」「プレーメンの音楽隊」などの絵本の読み聞かせを始められたという。

——「子どもたちは競うようにして、その本を借りて帰り、家の人に読んでもらったり、絵本の

内容を遊びに反映させるようになった。食い入るように手話を見つめ、『しあわせの王子』『ごんぎつね』の絵本を読んでもらいながら泣き出す子もいた。明らかに子どもの気持ちは絵本の内容によって動かされていた。また、読み聞かせを楽しんだあとで、二度三度と自分で繰り返して読む姿も見られた。

吉本先生は、子どもにとっての絵本の意味を以下の4点にまとめている。(1)絵本そのものを共感しながら楽しむことで、心を安定させる。(2)遊びやコミュニケーションのきっかけになる。(3)経験したことを整理・拡張し、想像の世界を楽しむ。(4)知識を広げる。

その上で、手話を使った読み聞かせの留意点をいくつか挙げておられる。①絵本を載せる台を使う。両手を充分動かせるように、絵本は譜面台などに載せて高さも調整する。②子どもたちとの距離を考える。近づきすぎても遠すぎても見づらいので、絵本も手話表現も見やすい距離をとる。③子どもたちが見やすい環境にする。④内容によって絵本を動かして使う。例えば「七匹の子やぎ」で、狼が子やぎを食べる寸前に絵本を動かして、狼が飛び出すような感じに見せる。また「三匹の子ぶた」で、家が飛ばされる場面は、絵本を揺り動かすとイメージしやすい。(後略)

#### 紙芝居上演との類似点と相違点

以上のような留意点を見ると、手話を使った絵本読み聞かせ(読み語り)は、紙芝居の上演とよく似ていることに気づく。①の譜面台などを使うのは、紙芝居における木枠の舞台に対応するし、④は紙芝居において、画を抜く速度を変えたりゆらしたりして行なう「抜き」の技法に対応する。

一方、紙芝居と手話による絵本読み聞かせとの違いは何かと問うてみると、それは言うま

でもなく音声言語の有無である。紙芝居のように、声の強弱や声色の変化によって聞く者の心の集中や弛緩を導くことができないため、その部分を手話と身ぶりの表現で補っていかねなければならない。吉本先生の報告の中で、「表現を切り替えるタイミングを考える」「手話・身ぶりの位置、方向、移動をはっきりする」「視線の方向に注意する」「喜怒哀楽をはっきりと表現する」といった指示がされているのも肯ける。

先生はさらに、「手話による読み聞かせを家で、家族と一緒に楽しみたい」という保護者の希望に応えて「お話ビデオ」を作成し、「三匹の子ぶた」「かさじぞう」「ガリバーの冒険」など10作品を収録して配布された。これは家庭でのコミュニケーションのきっかけになり、保護者の手話学習にも効果的だという。

ただし、「子どもと対話しながら読み進められるところが、生の読み聞かせの良さ」だと先生は述べておられる。手話を使って、「子どもと対話しながら」読み進めるというのは一体どんな具合なのだろうか。日を改めて、手話による絵本読み聞かせを実際に見せていただくことにした。

#### 小学部「ろう読会」参観

9月25日(火)午後、再び奈良県立ろう学校を訪れた。この日は同校の保護者有志によって2008年12月に結成された「ろう読会」が月1回校内で行っている手話による絵本読み聞かせの上演日だった。3名でスタートしたこの会は、2018年現在10名が会員登録し、練習と本番を月1回ずつ行なっているという。

昼食後の休み時間を利用した約15分のプログラムで、この日は小学部1年生から6年生までの約20名が一室に集まり、3名のメンバー(いずれも女性、1名がろう者、2名が聴者)が読み聞かせを行なった。

1冊目は、世界のさまざまな場所にくらす子どもたちの通学風景を紹介した写真絵本『すごいね！みんなの通学路』（ローズマリー・マカーニー、西村書店）、2冊目は、髪の毛を切るのがイヤなこんもりくんのもじゃもじゃ頭のなかに隠れていた不思議な世界を描いた『こんもりくん』（山西ゲンイチ作、偕成社）で、それぞれ聴者のIさんとKさんが読まれた。また3冊目は、おまじないによってくさびら(きのこ)がどんどん増殖していく『狂言えほん くさびら』（もしたいつみ文、竹内通雅絵、講談社）で、ろう者のYさんが読まれた。

筆者にとってはじめての手話による絵本読み聞かせだったが、2人の聴者の方は、絵本に書かれた文章を誠実に手話で翻訳して伝えているという感じできっちりとした印象を受けた。

一方、ろう者のYさんは実にダイナミックで躍動的だった。翻訳ではないネイティブの「語り」だった。そしてその圧倒的な迫力に引き寄せられるように、子どもたちも明確な音声言語ではない「声」と、手話や身振りで自らの感情をエネルギーに表現していた。そのやりとりは、実際には音声言語ではないにもかかわらず、「語り」の場に互いの「声」が飛び交っているようだった。これが「手話で対話しながら読み進める」ということなのだ気づかされた。

この後、「ろう読会」の皆さんに少しお話をうかがった。月に1回の読み聞かせ会の対象は小学生のみだったが、昨年からは幼稚園でも行うようになったこと。参加は自由で、低学年が多いこと。これまでに紙芝居を上演したこともあり、また中高生を対象に手話で落語を演じて好評だったそうだ。

この会を続けて来られた原動力となったのはやはり、興味深く「聞いて」くれ、終わった後に「もう1回やって！」とリクエストしてくれる子どもたちの「声」だという。日本語に自信がな

いためか、ろう者の「読み手」が少ないので、今後もっと多くのろう者の保護者たちに、この会に関心を持ってもらい、「読み手」としても参加してもらいたいとのことだった。

#### 幼稚園「おはなしタイム」参観

保護者たちによるこの「ろう読会」の活動の他に、同校には前述の吉本先生によって幼稚園で始められた手話による絵本読み聞かせ会「おはなしタイム」があり、毎週水曜日の午後1時から約20～25分、幼稚園の教師が「読んで」いる。現在、この活動を中心となって進められるろう者の教師・小林由季先生によれば、保護者たちの「ろう読会」が絵本を「読む」楽しさを味わってもらうことを主眼としているのに対して、「おはなしタイム」の方は楽しさだけでなく言語指導という教育目的も併せ持った活動だという。

こちらの活動もぜひ見せていただきたいとお願いして、10月31日(水)三たび同校を訪れた。午後1時に到着し幼稚園へと案内された。ちょうど昼食後の昼休みで、園児たちは外で元気に遊んでいた。人工内耳の子もいれば補聴器の子もいる。難聴のレベルはさまざまで、また他の障害も複合的に持っている子もいるようだが、活発に遊んでいる彼らの様子や表情は聴者の幼稚園と全然変わらなかった。

やがて年長の「あお1組」の教室に幼稚園の子どもたち19名全員と6,7名の先生が集合し、午後1時15分、おはなしタイムが始まった。

この日のプログラムは次の通り。

- ①手遊び「一本指」(リード:滝川先生-聴者)  
「一本指 一本指 鬼になっちゃった／二本指  
二本指 とんぼになっちゃった／…／五本指  
五本指 おばけになっちゃった」

この後、「五本指でできるものって他に何が

ある？」と先生が質問すると、「クモ」「蝶々」「ペンギン」「ひょっこり覗く」「投げる」「あとで」などの答えが次々と子どもたちから発せられた。「ひょっこり覗く」や「あとで」といった答えは手話を使うろう者の子どもならではだろう。

## ②「絵本の歌」(リード:滝川先生)

「えほん えほん ぱちぱちぱちぱち うれしいおはなし かなしいおはなし しーしーしーしーずかにききましょう」。毎回はじめにこの歌を全員で歌っているようだ。

## ③絵本『グリム童話集より 金のがちょう』(読み語り:岩下先生-聴者)

手話と口話の両方で語られたが、がちょうに触った者は手が離れなくなり、次々とつながっていく場面は、特に大きなジェスチャーを交えて語られ、子どもたちも笑い転げながら「聞いて」いた。読み終わると子どもたちに感想を求めた。みんなの前に進み出て発言する。「行列が長くなったところが面白かった」「金のがちょう、大きくなったなあ」…。口話が聞き取りにくい子は先生が補助を務め、ほぼ全員が手話や口話で発言した。あっという間の15分だった。

## 小林先生へのメールインタビュー

この日の帰り、今年度4月～12月に行うおはなしタイムで読む絵本リストのコピーをいただいた。リストを見ると、全15冊中、日本の昔話が6冊(「猿地蔵」「一寸法師」「舌切り雀」「浦島太郎」「おむすびころりん」「かもとりごんべえ」)、ヨーロッパの昔話が8冊(「赤ずきん」「うさぎとかめ」「金のがちょう」「大きなかぶ」「狼と七匹の子やぎ」「ブレーメンの音楽隊」「小人と靴屋」「白雪姫)」もあった。

小林先生にメールで質問し、次のような回答をいただいた。「Q. 昔話を積極的に選んでおられる理由は何ですか? A. 昔話に親しんで欲しい、知っていて欲しいという教師側の意図に

よるものです。例えば、聞こえない子どもたちが大人になった時に「桃太郎がね～」という話題になった時に、話題を共有できるようになって欲しいという理由からです。また、最近の本屋では最近の絵本が出ていることが多く、保護者の方もそれを選ぶ傾向があるので、学校で意図的に読もうという意図もあります。」

「Q. おはなしタイムに対する保護者の方の感想や要望にはどのようなものがありますか。家でも絵本をよみ合ったり、紙芝居を演じたりされているのでしょうか? A. 家庭にもよりますが、繰り返し読んでいる絵本であれば、子どもも読み手になったりする家庭もあると伺っています。また、絵本の読み合いではないですが、大人が読んでおられる家庭もあります。」

「Q. おはなしタイムの活動を実践してよかったと思うことは何ですか? A. 絵本を楽しみにしてくれる子どもが増えてきて、給食の時に「今日はおはなしタイムがあるね」と話しかけると、「誰が読んでくれるの?」「どんなおはなし?」と聞いてくれるようになりました。」

奈良県立ろう学校において、保護者たちと教師たちが、それぞれの立場で、手話を使った民話絵本の読み聞かせを行なっている様子を見てきた。取材を通して、民話が手話を学ぶための格好の教材となることや、お話の世界を語り手や他の聞き手と一緒に楽しむための打ってつけの道具となることが分かってきた。

その楽しさは、聴者の聞き手とも共有できるものであるに違いない。ろう者も聴者も一緒に、手話を用いた民話語りを楽しむ機会が持てるといい。これを夢に終わらせないためにはどうすればいいか考えていきたい。と同時に、自分でも手話を使ってろう者の方がたとコミュニケーションが取れるよう、少しずつでも手話を学び、使っていこうと今、思い始めている。